

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 9 - 6 / 100号記念

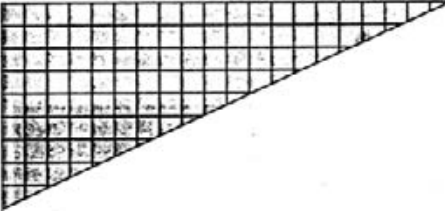
アルマナック子ども

目次

子どもたちは、いま

—子ども時代を失った子どもたち—	3
1. 子どもをとらえにくい	4
2. 遊び論の中で	9
3. 塾通いに関連して	14
4. 国際比較調査から	18
第1章 子どもと勉強	29
1. 教科間の意識をめぐって	31
2. 教室の雰囲気	44
3. 帰宅後の学習	51
4. 学業成績のもつ意味	63
第2章 子どもと遊び	71
1. 放課後の生活	73
2. 遊びの小集団化	77
3. 遊びの室内化	86
第3章 子どもと人間関係	97
1. 学校の人間関係	98
2. 子どもにとっての両親	111
第4章 子どもの生活	127
1. たくさんの物に囲まれて暮らすぜいたくな子どもたち	129
2. 生活体験に欠ける子どもたち	140
3. 立ち遅れた生活習慣の形成	145
第5章 子どもと社会	155
1. 子どもの経済感覚	157
2. 子どもの中の民主主義	161
3. 子どもと職業	164
4. 子どもの尊敬する人	169
第6章 子どもと病理	173
1. 「半健康」の子どもたち	175
2. 子どもの人間関係の歪み	178
3. 規範意識の崩れをめぐって	184
4. 親たちはどう見ているか	187
おわりに	192
「モノグラフ・小学生ナウ」テーマ一覧	194

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。



子どもたちは、いま


—子ども時代を失った子どもたち—

放送大学客員教授

深谷昌志

東京学芸大学教授

深谷和子



1. 子どもをとらえにくい



1) さまざまな子ども論

このところ、子どもの姿を根本からとらえなおそうとする著作の出版が続いている。そのきっかけをつくったのが、アリエス (Ariès, P.) の『子供の誕生』(L'enfant et la vie Familiale sous l'ancien Régime 1973 杉山光信・恵美子訳 みすず書房) であろうが、そのほかにも、マリー・ウイン (Marie Winn) の『子ども時代を失った子どもたち』(Children without Childhood 1981 平賀悦子訳 サイマル出版) やニール・ポストマン (Neil Postman) の『子どもはもういない』(The Disappearance of Childhood 1982 小柴一訳 新樹社) などが目につく。さらに、子どもたちのその後の成長を扱ったものに、ギリス (Gillis, Z.R.) の『若者の社会史』(Youth and His-

tory 1981 北本正章訳 新羅社) がある。

そのほか、エルキンズ (Elkinds, D.) の『成長をせかせせられている子どもたち』(The Hurried Child 1981) のサブタイトルは「あまりにも早すぎる成長」で、親や教師が子どもをあまりにおとな扱いする傾向に疑問を投げかけている。また、パッカード (Packard, V.) の『危険にさらされている子どもたち』(Our Endangered Children 1983) は、働く母親の増加や離婚の急増などの社会変化の中で、子どもの成長が危機的になったと指摘している。さらに、マギッドら (Magid, K., McKelrey, C.A.) の『危険な子ども』(High Risk 1987) は人間関係の絆のたちきられた現在の成長に危機感を抱いている。

これらは、主としてアメリカで評判となった著作の一例だが、当然のことながら、書名の通り、それぞれは視点を異にしており、扱っている内容も同じでない。しかし、ウインとポストマンが、くしくも著書の表題に『子ども時代』(Childhood)を使ったように、いずれも子どものさまがわりを問題にしている。つまり、これまでのいかにも子どもらしい子どもが姿を消して、何か新人種を思わせる子どもが登場している。そこでそうした子どもの出現に危機感を抱いて、子どもとは何かをあらためて考えようとしている。

具体的に、ごくふつうの子どもの生活を考えてみよう。

学校から帰り一休みをしてから、駅前の学習塾へ行く。2時間くらい勉強をした後、本屋へ寄り、マンガ雑誌の立ち読みをする。帰宅後、夕食を食べ、「世界まるごとHOWマッチ」を見る。自分の部屋の中で、ヒット曲のカセットを聞きながら、宿題をし、塾の勉強の整理をする。入浴して、夜10時半にベッドで就寝する。

都市に住む小学高学年生ならば、日常的にくり返している生活で、上記の内容に違和感を抱く者はいまい。しかし、仮に、昭和30年代に時の流れを逆転させると、上述の中に、学習塾、テレビ、ラジカセ、子ども部屋、ベッドなど、そのころにはまだ庶民にとって高嶺の花、あるいは無縁のものだったものが多いのがわかる。つまり、テレビひとつをとっ

ても、テレビのある暮らしをあたり前と思いがちだが、子どもの長い歴史の中で、テレビのない暮らしのほうがずっと昔からごく近年まで続いていたのであって、テレビと共に育った子どもは、たかだかこの20年くらいに限られている。したがって、テレビが子どもの人間形成に大きな影響力を与えたとしたら、テレビのない世代の子とテレビを子守り歌代わりに聞いた子とで、成長の仕方に開きが生ずるのがあたり前なのであろう。しかし、テレビがまたたく間に津々浦々まで普及し、しかも、テレビのない生活へ戻ることはありえないので、テレビの意味がわかりにくくなる。

そうした事情はテレビに限らず、上述したような子ども部屋やラジカセ、学習塾などにもあてはまる。いずれにせよ、子どもをとりまく状況が大きく変わっているので、一昔前の子どもをイメージに置くと、子ども時代の喪失という感じが強まってくる。少なくとも、どういう状態のコドモを子どもというのかを考えておかないと、現代の子ども論は成立しにくいように思われる。

とくに、日本の場合、生まれた地域によって一生が規定されていた時代と比べ、子どもの世界から地域の影が消えたことによる地域差の解消は望ましい傾向であろう。そうした反面、地域差が失われると、子どもたちの成長のスタイルが似通ってくるから、仮に日本の子どもの成長に歪みを伴っても、そうした歪みに気がつきにくくなる。

2) 地域の影が消えた

そうしたことに気づいて、海外の子どもたちが、どんな生活を送っているかを知りたいと思うようになったのは15年ほど前になる。「知りたい」というより、子どもたちの生き生きとした姿を自分の目や耳を使って確かめてみたいと書いたほうが、そのころの気持ちに近いかもしれない。

『モノグラフ・小学生ナウ』もそのひとつだが、子どもを対象としたアンケート調査を実施することが多い。しかし、実をいうとアンケート調査に先立って、いろいろな地域を訪ねて、子どもたちから話を聞くようにしている。とくに東京に住んでいると、都会の子がすべてと思いがちになるので、山村や漁村へ

出向き、子どもたちと話をするようにしている。

しかしこの10年来、山村を訪ねても山村らしさが感じられなくなった。もちろん都会と比べ、自然に恵まれているなど、子どもをとりまく環境は変わっている。しかし子どもたちの生活ぶりを見ている限り、都会の子とほとんど変わらない。

飛騨の白川郷は大好きな所なので、何回か訪ねている。昭和61年秋に訪ねたとき、子どもたちは「ドラゴンクエストII」に熱中していた。実をいうと、白川郷へ行く10日ほど前に、東京都下中央区のT小学校で面接調査を行っていた。

かつて児童数が千人を超えたT小学校も、都心のドーナツ化現象のあおりを受けて、全校生徒48人のミニスクールとなった。なかでも1年生は3人だけで、このままいくと100年以上の伝統を誇るT小学校も、近くのS小学校に合併される運命になりそうだという。

かつての大規模校がミニスクール化したの

で、教室があまる。給食室に第1と第2とがあり、曜日によって2つの部屋を使いわけているなど、学校側は持てる者の悩みにも似た妙な苦勞をしていた。

何軒かの生徒の家庭を訪ねてみた。都心の一等地なので、5階建ての職住兼用のビルに子どもたちは住んでいる。1階が店、2階が倉庫、3階が居間、そして5階が子ども部屋という感じである。したがって子どもたちは、階段を上下して在宅時間を過ごす。

もちろん銀座に近い所なので、子どもたちが遊べるスペースはない。大半の子どもは高層ビルの子どもの部屋にこもりきりになる。親たちもそうした子どもを心配して、スポーツクラブに通わせている者が多い。小学4～6年生27人のうち、学習塾へ行っている子が21人、水泳などのスポーツクラブが16人、そのほかのおけいこごとが20人である。そして子どもたちは、平均して週に2.8回、おけいこごとや塾へ通っていた。

親たちによると、自分の家にいるとひとり



きりになるから、友だちづくりを兼ねて、おけいごとへ通わせているという。そうした努力を重ねても、そのほかの時間は部屋の中にももることになるので、子どもたちのテレビ視聴時間は3時間を超えているほか、男子たちは「ドラゴンクエストII」に熱中していた。

48人の子どものうち、男子は23人でそのうちの19人、女子は25人中の16人、ということになる。35人がテレビゲームを持っていることになるので、所持率は73%と全体の4分の3に迫っている。そして子どもの中で、ソフトの売り買いが始まり、いざこざも増えた。それと同時に、テレビゲームは目によくないなどの情報もあって、学校としてもテレビゲームを放置しておくわけにいかず、次回の職員会議でテレビゲーム対策を討議することとなった。

そうした話を聞いた直後に、白川村を訪ねたので、子どもたちの家に「ドラゴンクエストII」を見つけて驚いた。

調べてみると、小学4～6年生は全部で32人、そのうち男子17人中の11人、女子15人の6人、つまり17人がテレビゲームを持っており、所持率は53%であった。

東京都のT小学校の子どもと比べ、「ファミコン」を持っている割合が2割ほど低い。したがって7割と5割とを比較すると、「ファミコン」所持率に地域差があるといえるの

かもしれない。しかし考えてみれば、T小学校は東京のどまん中、銀座まで歩いて5分の距離にある。それに対し白川村は名古屋から高山線に乗り、特急を使って3時間、さらにそこから、タクシーを利用しても3時間くらいはかかる里で、秘境の地に近い。

そうした地理的な条件を異にする地域でも、子どもたちが同じ時期に同じタイプの「ファミコン」に興じている。実際に白川村では、校長先生が職員会議での話し合いをふまえて、1時間以上「ファミコン」をやらないように、父母にお願いの文章を発送していたし、T小学校でも次回の職員会議の議題にするつもりだという。

そうした意味では、白川村の小学校とT小学校とでは同じ課題をかかえているといえよう。実際に、白川村の子どもたちに前日の行動をたずねたところ、たまたま面接対象日が木曜だったのでほとんど全員の子が、巨泉の「世界まるごとHOWマッチ」を見てから「ザ・ベストテン」という視聴パターンをすごしていた。そして視聴時間の平均は3時間10分であった。それに対しT小学校の子は、塾通いなどをしているので、視聴時間は短めだが、それでも1時間50分をテレビに費やしており、巨泉の「世界まるごとHOWマッチ」を見ている子は65%に達する。

3) 子どもの歪みをとらえにくい

これまで、白川村と東京の中央区というまったく地域を異にする子どもの生活を紹介してきた。

さすがに白川村へ来ると、学習塾やおけいごとはなかったが、それでも子どもたちは、家にこもって放課後をすごしており、遊びたわむれる子どもたちの姿はなかった。

実をいうと白川村を訪ねたのは、今回が始めてではなく、15年ほど前にも飛驒の里を訪

ねている。そのころ、子どもの遊びの調査にたずさわっており、都会で子どもたちが遊んでいないのは確かであった。当時、自然環境が破壊され、遊び場がなくなったことが、遊び喪失の背景だといわれていた。たしかに自動車が行き来し、ボール投げひとつできない環境では、子どもが遊ばないのも無理はない。それならば自然環境に恵まれたところへ行けば、子どもたちが遊んでいるのではないか。

そう考えて、山村へ出向いてみた。ほっぺたを真っ赤にして、元気にとび回っている子がいるにちがいないと思ったからである。しかし白川村はむろんのこと、どこへ行っても、子どもたちの遊ぶ声は聞こえなかった。都市のように自然環境が失われたからでなく、過疎化が進展し、子どもの数が減った。あるいは、家のいごちちがよくなった。そしてテレビやマンガなど、家庭にいても楽しめる玩具がふえた。

したがって、山村と都市とでは遊びを失わせた背景は異なる。しかし背景は異なるにせよ、現象的にみると子どもたちが家にこもり遊んでいない事実、都市や山村を越えて共通している。そうだとすると、仮に子どもの遊びの喪失に問題を感じる人がいても、どこの子も遊んでいないのであるから、遊んでいないのが普通だと思いがちになる。

豊かな情報化社会を迎えると、テレビや「ファミコン」、ラジカセなど、子どものまわりには魅力のある対象がふえるので、かくれんぼや鬼ごっこをしなくなるのも、時の流れである。だから、遊ばなくとも仕方がないのではという感じ方である。

そうだとしたら、豊かな情報化社会をすで

に迎えたアメリカやイギリスの子が遊んでいるかどうかを確かめてみたい。そう思って、海外行きを計画したのである。

換言するなら、一昔前まで東京の中にも山の手育ちと下町育ちがあった。下町は町人の文化を受け継いでいるから、あけっぴろげでくったくがない。教育熱心とはいえないし、しつてもきびしくなかったかもしれない。しかし人情味があり、他人の子でも受け入れるような温かみも多かった。

それに対し、山の手は武家の文化を継承し、それに、丸の内のサラリーマン文化とが重なる形でしつけが行われたので、基本的にしつけがきびしい。それに、教育期待も強い。いわば近代型のしつけだが、ともすると型にはまり、人間味に乏しくなりがちになる。

いずれにせよ、そうした形で、山の手育ちと下町育ちとがあれば、それぞれの育ちのもつ歪みを、他の文化と対比すると明らかになる。しかし都心と山村とのしつけの同質化が進み、差が少なくなると、対比する鏡がないので、日本の子どもの育ちがもっている歪みがわかりにくい。われわれがそれほど問題はないと思っけていても、本当をいうと日本の子は歪んだ育ちをしているのではないか。

2. 遊び論の中で



1) 回想の中の遊び

もちろん、現代の子どもをとらえる鏡を持つのは諸外国との対比でなく、過去の日本との対比によっても可能だ。そこで、遊びを例にして、過去をとらえてみよう。

吉村昭は、『東京の下町』の中で、昭和10年代前半の遊びを回顧して、次のように書き綴っている。

「ベイゴマにつぐ賭けをともなう遊びはメンコだが、ベイゴマのような高等技術を要しない。それでも、近所の子供たちとメンコ遊びをした。ベイゴマは綱とともに空かんに入れるが、メンコは蜜柑箱に並んで詰める」。

しかし、こうした回顧は、いつごろ、そして、どこでという時間や場所を越えた形で認められる。たとえば、「子供たちは、学校から

帰ると家の中にカバンを投げ出してあちこちから集まって来る。そして、日の暮れまで遊びに耽る」「こうして遊び載れているうちに、いつとなしに日が暮れ、あちこちの家に灯がともる」「すると子供らは、一人去り、二人去りして町は夜となる」(明治44年生まれ、大島政男『大正も遠く』)は、大正時代の子ども生活を回顧した一節である。そして、以下、鬼ごっこ、チャンバラごっこ、かくれんぼ、石けりなどをした記述が続く。もちろん、この時代は、「自動車などが街路をわが物頭に走っていなかった頃のこと、せいぜい荷馬車が時々通るか、人力車が通る位、道路はもちろん舗装されていない」状況であるから、現代とは遠く離れているかもしれない。しかし

描かれている遊びの姿に、時代を越えたものを感じる。

「子供たちの放課後は雨さえ降らなければ表で暗くなるまで遊び回った。この遊びの姿は、今思い出してみると、仲間も私も綿入れの袴てんを着ている。幼い弟妹を背負っておぶり袴てんを着ている姿もある」「自動車が町に二、三台しかない大正期には町筋そのものがキャッチボールの場所であり、小学校の子供たちは、町中でゴムボールの野球をやった」（明治45年長野県生まれ、古島敏雄『子供たちの大正時代』）も、大正時代の事例だが、この回想にも、子ども時代の遊びとして、こま回しや戦争ごっこ、兵隊将棋、杉鉄砲、なわとび、ビー玉などが登場してくる。

また、沢村貞子の『私の浅草』（大正12年東京生まれ）の中にも、「どこの家も手せまだから、子どもたちはなにかあるとすこし外へ行って遊んでおいで」と、親たちに追いたてられた。

「観音さま附近、伝法院の庭、花屋敷の前の茶畑など、あっちこっちに空地があったのでしあわせだった。建てこんだ家のまわりにも、つぎからつぎへ、細い路地がつながっていたから、かくれん坊でも陣とりでも、けっこう面白く遊べたものだった」。

もちろん、こうした遊びに時代が反映されるのもたしかで、とくに玩具は、それぞれの

時代を象徴している。一例をあげるなら、かつての遊びを代表するメンコ、ビー玉、ベーゴマにしても、メンコは江戸時代の泥メンコ、そして、明治中期の鉛メンコを経て、明治40年代に紙メンコの時代へ入る。その後も、丸メンコから角メンコに形が変わると同時に、相撲メンコから野球選手メンコ、さらに、第二次大戦後の怪物メンコへと変化していく。

また、ビー玉が、明治30年代以降、ラムネの普及につれて、ハイカラな玩具として、子どもの世界に浸透していったのは周知の通りであろう。さらに、ベーゴマについても、それなりの変遷があり、鉄製のベーゴマが子どもものとなるのは、明治も末期へ入ってからといわれる（たとえば、斉藤良輔『日本のおもちゃ遊び』）。

さらに第二次大戦後にしても、フラフープ、だっこちゃん、怪物、リカちゃんハウスなど、それぞれの時代を連想させる玩具がある。しかし、そうした玩具を離れて、遊びの姿そのものに迫ると、時代を越えた感じがするのは、すでにふれた通りである。

実をいうと、そうした意味では、遊ぶ子どもの姿に、時と場所を問わずに共通するものが多い。歴史をさらにさかのぼって、江戸川柳の中に、子どもの遊びを求めてみよう。

ためいきをすみっこへするかくれんぼ
ままごとの亭主も客もぐわんぜなし



約束を小指でするや子供ども
せみのなく下に子供が二、三人
春風に空て武者絵のときの声

(いずれも、北出公則他「子供の遊戯」
—「解釈と鑑賞」昭和50年12月)

いずれも読んだだけで、遊んでいる子ども
たちの光景が浮かんでくる内容である。

遊びを対象とした先行研究には優れたもの
が多いが、その中の1冊、前田勇の「児戯叢考」
(昭和19年、弘文堂)によると、「蛙が鳴くから

か一えろ」といういいまわしは、式亭三馬の
『浮世風呂』の中に認められるし、かくれん
ぼは『宇津保物語』に「かくれ遊び」として
登場しているという。また、鬼ごっこは「鬼
渡し」といわれたものが文化年間に鬼ごっこ
に変わったという。考えてみれば、子どもの
いるところに遊びがみられるのは当然の話で、
すでに『古事記』には相撲や釣り、木登り、
そして、『日本書紀』に双六や蹴まりが紹介さ
れている(酒井欣「日本遊戯史」)。

2) 鬼ごっこからテレビへ

そう考えてくると、子どもたちが鬼ごっこ
をしたり、かくれんぼをしたりする姿は、子
どもという存在が出現して以来、ということ
は、人類が登場して以降ずっと見受けられた
なじみ深いものなのであろう。

そして、アジアはむろんのことだが、欧米
などへ調査旅行にいくと、遊びたわむれてい
る子どもの姿を見かける。しかもテレビの放
映時間が短く、おもしろい子ども番組の少な
いヨーロッパとちがって、日本以上に多くの
チャンネルがあり、子どもを楽しませてくれ
るアメリカでも、子どもの遊びが下火になっ
たとの声が聞かれる。しかし、それはかつて
の遊びとの対比であって、日本と比べれば、
アメリカの子は、よく遊んでいる印象を受ける。

それだけに、「鬼ごっこからテレビへ」に象
徴される子どもの遊びの変質は、有史以来の
子どもの生態系が変化してきたことを意味し
ている。しかもその変化が、ある日、ある月
に限らず、長期間持続されていくので、遊び
の変質は、たかだか遊びの問題というにして
は、あまりに大きな意味を含んでいる可能性
が強い。

そこで、かつての、というより、現在でも
世界の多くの国で見受けられる遊びは、どの
ような属性を備えていたのかを考えてみるこ
とにしたい。

今まで引用してきた文の中に、多くの遊び
があげられている。それらに共通しているの
は、①戸外で、②友だちと、③体を動かさな
がら、④自然を素材として、⑤自発的に遊ぶ
などの性格であった。つまり、われわれがイ
メージにおく遊びは「群れ型」で、そうした
群れは、①近接した家の子どもたちから構成
され、②おとなの入りこむことの少ない、③
異年齢の子どもを含めた、④子どもたちの一
種の自治組織という条件をも備えていた。

そうした子どもの遊び仲間が「ギャング集
団」とよばれたのは周知の通りである。遊び
たわむれるようすが、ギャングを連想させる
ところからこうした見方に立つと、現代の子
どもたちが、遊びを失ったというのは正確な
記述でないのに気づく。つまり、現代の子ど
もたちも、マンガやプラモデル、テレビ、ゲ
ームウォッチなど、それなりに遊びの対象を
持っているのである。しかし、現代の遊びは、
①室内で、②ひとりきりで、③体を動かさず
に、④商品化されたものを相手に、⑤受け身
の形ですごす「孤立型」の性格を強めている。
したがって、遊びが群れ型から孤立型へ変質
したのであって、それを集約したのが、すで
にふれた「鬼ごっこからテレビへ」の変化と
なる。

3) 孤立型遊びを支えるもの

① 活字メディアとの接触

こうした遊びの変質は「群れから孤立へ」を特徴としているが、換言するなら、子どもをとりまく環境が、孤立をしても孤独感を持たないで済むようになった。すなわち、情報化社会の到来を背景として成立しているのがわかる。

そこで遊びの中でも、情報化と結びついた活字メディアと子どもとのかかわりを考えてみることにしよう。

日本ではじめて子ども向けの雑誌が刊行されたのは、明治10年に刊行された「穎才新誌」といわれるが、マス・メディアという感じの子ども雑誌が登場したのは、創刊号から1万2000部を印刷した「少年園」(明治21年)や「日本之少年」(明治22年、博文館)、「こども」(明治22年、東京教育社)以降となる。その後、明治24年には大手出版社の博文館から「少年文学叢書」が出版されている。日本の児童文学史上の1ページをかざった巖谷小波の『こがね丸』は、その中の1冊である。ちなみに、女の子の間に人気のある「小公女」が若松賤子の訳で「女学雑誌」に連載され始めたのは明治23年、「乞食王子」が文武堂から出版されたのは、明治30年であった。

しかし、この時期に、子ども向けの雑誌や本に接した子どもは、富裕層の家庭に限られ、子ども雑誌が子どもの世界に幅広く浸透していったのは、明治40年代へ入ってからであった。明治38年に実業之日本社から「幼年の友」や「日本少年」、翌39年に、博文館から「幼年画報」や「少女世界」が刊行されたのがその一例だが、明治44年には、立川文庫の出版も始まっている。周知の通り、立川文庫は1冊3銭で新しい本を読める一種の貸本制をとり入れ、「岩見重太郎」や「水戸黄門」「宮本武蔵」などを、いわば子ども向けの講談本の形で刊行

していった。そして、それまでの雑誌が、どちらかというと都市を中心に流布していったのと比べ、農村の子どもたちにも親しまれたという意味で、立川文庫が子どもに影響を与えたものは大きい。

なお、芥川龍之介の「杜子春」や豊島與志雄の「天下一の馬」、宇野浩二の「路の下神様」など、現在では名作とよばれる童話や北原白秋の「ベチカ」や「この道」などの詩を掲載した鈴木三重吉の「赤い鳥」が創刊されたのは、大正7年であった。そのほか、「子供之友」(大正3年、婦人之友社)、「コドモノクニ」(大正11年、東京社)、「幼年倶楽部」(大正15年、講談社)のように、大正時代へ入ると、それぞれのレベルで、子どもたちの人間形成に影響を与えたと思われる雑誌の刊行が続いている。

しかしこうした雑誌は、子どもの心に強い印象を与えたといっても、それらは月に1回、あるいは、正月や盆などのこづかいをもらったとき、子どもの世界にとびこんでいく客にすぎず、立ち読みや友だち相互のまわし読みを入れても、接触量が多いといえなかった。そのうえ、活字メディアであるから、通俗的といわれる立川文庫であっても、子ども向けの制約があり、おとな社会の情報にストレートに入ってくるテレビとは、質を異にしている。

② マス・メディアの中で育つ

なお、関屋五十二と村岡花子とが、1週間交代で、NHKから「コドモの新聞」を放送し始めたのは、昭和7年(大阪のJOAKでは昭和3年5月)で、大正14年にラジオの本放送が始まってから8年後のことである。といっても、「コドモの新聞」は、午後6時から20分までの「子供の時間」に続く5分番組であるから、全部の時間を合わせても、テレビ30分番組の1本分にみえない。

そして、そうしたラジオの時代は、昭和22年7月から始まった「鐘の鳴る丘」(昭和25年12月まで790回)を経て、昭和30年代後半のテレビ普及時代まで続く。

周知のように、わが国でテレビ放送が始まったのは、昭和28年2月、そして、テレビの受信契約台数は、昭和33年の100万台から、35年の500万台を経て、37年3月には1000万台を超え、家庭あたりの普及率がほぼ5割に達した。ちなみに、フジテレビ系の「小川宏ショー」やNTV系の「11PM」が放映を始めたのは、昭和40年になる。

もちろん、この時期に、核家族化や家族サイズの縮小、家庭電化製品の普及、団地型住宅の定着などが、経済の高度成長を背景として生じており、テレビの普及は、そうしたマクロな産業化された豊かな大衆社会への流れの一側面を構成するものなのであろう。したがって、子どもの生活に限らず、主婦の暮らしや父親のあり方、そして政治や経済の諸問題についても、ほぼ1世紀前に近代化が始まり、いくつかの転換期を経て昭和40年代の初めに、また新たな局面を迎えるという図式が成り立つのであろう。

ちなみに、加太こうじは「紙芝居昭和史」の中で、昭和30年代のなかばに、紙芝居は終えんの時を迎えたと回想している。それは同時に、子どもたちから親しまれた駄菓子屋が姿を消した時代でもある。

したがって、昭和40年代の前半を子どものサイドからとらえ直すなら子どもに紙芝居や駄菓子屋のように、家内工業的で、地域に定着した、マイナーな影を背負った子どもの文化に代わって「鉄腕アトム」(昭和38年、フジテレビ系)や「オバケのQ太郎」(昭和40年)の放映開始、そして「週刊少年マガジン」(講談社)や「週刊少年サンデー」(小学館、いずれも昭和34年)の発刊が続き、子どもの文化が大手の資本に支えられ、いわば表通りに進出してきたのである。

しかも、子どもの場合、生まれてからの期間が短く、現在がすべてで過去とのつながり

に乏しい。そのため、現在の環境からの影響をダイレクトに受けやすいだけに、環境的な変化はおとなと比較できないほどの衝撃を与える。

第二次大戦後、戦前派、戦後派のように戦争体験の有無を物差しにすると、世代論を語りやすかった時代がある。それと同じように、物心ついたときにテレビがあったかどうかで、テレビ前派とテレビ後派に分けるのが可能なような気がする。たとえば、仮に、テレビが庶民の家庭に普及した昭和35～6年をテレビ・エイジ元年と考えるなら、それ以降の生まれの者はテレビ後派、そして、昭和一桁以前はむろんのこと、二桁でも、昭和10年代前半に生まれた者は、成長した後に、テレビを迎えたという意味で、テレビ前派となる。もちろん、両者の中間層が、テレビ中派になる。

そして、テレビ後派の一期生はすでに大学を卒業しただけでなく、その予備群は、続々と巣立っている。こうした状況を考慮すると、子どもたちの遊ぶ姿に普通りを望むのは、無理な注文のように思われてくる。



3. 塾通いに関連して



1) ジュク・スクールのない社会

日本の子どもたちを見ていると、あたり前だと思われ親しんだ現象が、日本以外の国々へ出かけてみると、あたり前でないのに気づく。そしてそうした現象のひとつに、すでに紹介した遊びの変質があろう。

小さな島国に、同じような言語文化をもつ人々が密集して生活している。そうなれば、同質化が促進され、同質以外のものの存在を考えられなくなる。

そこで、遊びとは別の例として、今度は諸外国と対比させて、塾通いをする子の姿をとりあげてみよう。アメリカなどで、教育の専門家と話をすると、ジュク・スクールが話題になる。ある程度まで教育についての見識をもった人なら、ジュク・スクールのままで通

用するくらい、アメリカ人の目からすると、学習塾はきわめて異様な日本の教育を象徴する現象なのであろう。

欧米の場合、周知のように学習塾、あるいはおけいごとという形態は、まったくといっていいほど見受けられない。もちろんアメリカに例をとると、放課後のスポーツは盛んであり、地域のクラブに加入して、野球やアメリカンフットボールなどに興じている子どもは、少なくない。また土曜や日曜などに、YMCA、ボーイスカウトなどの活動に参加する子どもも多い。さらに夏休みともなると、さまざまな長期のキャンプ・プログラムが発表され、3週間、ときには1か月以上のそうした野外活動に、子どもを行かせるのみな

り一般化した形式である。

このようにみえてくると、アメリカにも第二の学校に近い性格の教育機関は存在しているとも考えられる。しかしそれらはスポーツを中心に、自然体験をつませる、社会奉仕をする、体を丈夫にするなどを狙いとしており、知的な訓練とまったく無縁の存在である。そうした意味では、アメリカの「第二の学校」は、「第一の学校」と異質の機能を果たす教育機関だと考えられよう。

アメリカの教育事情についてはさまざまな文献が出されているのでそれを利用してほしいが、アメリカの学校を見ていると、一人一人を尊重している態度が目につく。

もちろん個性を尊重するあまり、平均してみると学力低下が生じたとの批判も高くなっているが、多くの学校では、ごく当然のように、学力差に対応した授業形態をとっている。

このように、一人一人の個性を尊重した教育が行われているので、親たちの間に、勉強のことは学校にまかせせる態度が育ってくる。校長に、知的に恵まれた子だけを集めて授業をしていると、それを受けられない父母の間から非難の声があがらないかとたずねてみた。

2) 香港の教育パ

香港は大好きな都市で何度か訪ねているが、たまたまホテルへ着いた翌日、窓越しに中学の校舎が見えた。早速ガイドと共に、授業見学へ出かけたが、あいにくその日は選抜試験が行われており学校は閉鎖されていた。しかし、試験の内容を聞いて驚いた。ケンブリッジ大学へ入学するための資格試験で、イギリスから試験官が出張して来ていた。その試験に合格すれば、ケンブリッジ大学の学生になれるという。

このところ日本でも、アメリカの大学を受験することができる制度ができ、人気を集めているが、ケンブリッジ大学ともなると、さすがにイギリスの影の濃い香港らしい光景だ

「他の子どもでも受けなければ参加してよいのですが、内容がむずかしいので、来たところで、その子が苦しむだけです。苦手なものを無理に習う必要はないと母親たちもわかっていますから、まったく問題はありません」がその答えだった。

そしてその校長は、どうしてそんな問いができるのか、質問の意味がわからないように思えた。考えてみれば、たかがハンバーグやステーキを食べるのに、つけあわせの野菜の種類から料理の仕方、それに肉の焼き方からポリウムまで、こと細かに指示をしないとけないお国柄である。それにしても料理の味がいまひとつという気がしないでもないが、とにかく食事から衣服・住宅まで、それぞれが個性を主張する社会である。そうした国情の差が、学校のあり方にも反映されているのであろうが、学校がそこまで個別に対応してくれば、塾通いの必要性に乏しくなるのかもしれない。

ことの是非はともあれ、アメリカの学校のもつ柔軟な姿勢が、アメリカにジューク・スクールが発生しないひとつの背景であろう。

と思った。しかし1日もたたないうちに、午前中に訪れた学校が超エリートスクールであることに気づいた。

高層ビルの並ぶ町並みを通っていると、2階とか3階とかに、「学校」という字が目につく。ガイドにたずねると、学校の看板だといふので、早速その中のいくつかに入ってみた。雑居ビルの1～2室が学校のすべてである。当然、教室内はすしづめで、雨天体操場はむろんのこと、学校専用のグラウンドも廊下もない。ビルの一室を借りた学習塾が学校と思えば、おおよその状況は理解できよう。

香港では、1978年から9年制の義務教育制度が実施された。しかしそれは形だけで、

未就学の子どもが少なくない。なにしろ、パスポートを持たずに入国した人でも、一定期間居住した証明があれば、市民権を取得できるという社会である。そのうえ公権力の及ばない九竜城もある。ここ数年来、香港の改革も進み、治外法権の地域が減ってきてはいるが、それでも正確な就学児童数がわからないともいわれる。

運転手つきの高級車に送られてイギリス風の中学校へ通う子どももいれば、雑居ビルの一室を借りた中国式の学校へ通う子、あるいは高層ビルの屋上に作られた粗末なプレハブ教室の夜学へ通う子、もちろん就学していない子もいる。このように小学校入学の時点から、家庭の経済力に応じて、在籍する学校のタイプが異なっている。

1974年に法令が改正され、中国語も英語と並ぶ公用語となった。しかしそれでも、医師や弁護士、そしてしかるべき会社の社員となるのに、英語が不可欠なことには変わりはない。したがって経済的に豊かな家庭の子は初めからイギリスなどの欧米の学校へ通うか、あるいは香港の「英文中学」へ入り大学だけ留学させるか、あるいは1911年設立以来の伝統を誇る香港大学——授業は英語で行われる——へ入学させねばならない。しかし、「英文中学」の入学試験は英語で実施されるので、当然のことながら「英文中学」へ入るためには英語で授業をする小学校へ入らなければならなくなる。しかし、それだけの学費の続かな

いは、中国語をつかう小学校へ入り、中国語を主たる言語とする「中文中学」へ進学することになる。

したがって、英語を使用する学校に人気が集まり、中国系の人々の中には家庭教師について、英語を学ぶ子どもが多いという。ちなみに、同行してくれたガイドは4歳の男の子の父親だが、将来、子どもを香港大学へ入れたいとかで、そのため英語を使用する幼稚園へ子どもを通わせていた。しかし、奥さんが中国人で英語が苦手なので、子どもの英語力が低下する。そうはいつても、家庭教師をやとう力はない。その結果、彼が暇な折、キングズ・イングリッシュを教えると語っていた。また、ガイドのかたわら書店へ寄り、子どもの補習用に「幼児智力測定」や「幼稚園暑期作業」などの問題集を購入し、専門家としてのアドバイスを筆者に求めていたのも印象的であった。

しかし、こうした状況は香港の中国帰属が決定して、微妙な変化を見せ始めている。香港をあらためて訪れたときに、富裕層の中に香港から脱出する者が少なくないと聞いた。たしかに、街全体になんとなく不安がただよっていた。そしてそうした傾向が、従来の英語中心の香港から中国語主流への動きを生み、学校教育にも微妙な影響が生じていた。

香港に限らず、アジアの国々へ行くときは同じガイドを頼むようにしているが、そのガイドから子どもを将来日本に留学させたい、そのとき、力になってくれないかと真剣に頼まれた。英文小学校に入学させたものの、自分の力ではアメリカへ子どもを留学させられそうもない。かといって、大陸から引きあげてきた体験をもつ自分としては、合併後の香港に不安を感じる。だから子どもを日、米、中国の3か国語をつかえる子に育てたい。いずれ中学生くらいになったら、日本語学校へ行かせるつもりだとのことであった。

日本という安定した国に生まれたわれわれにはわかりえない悲哀を、ガイドの話に感じ、どこまで力になれるかわからないが、役には



立つと約束して帰国した。今年の年賀状の中に、ガイド氏からのものがあり、父性愛の発露に心打たれるものがあった。たまたま、本稿の執筆中に、北京の学生運動をめぐる問題

が発生した。そして、香港の人たちがそうした動きに敏感に反応したというニュースが流れた。将来に不安を抱くのはガイド氏に限らないようだ。

3) シンガポールは家庭教師ブーム

韓国や中華民国 台湾 の教育事情はのちにふれるので、両国を除くと、日本以外の国で、学校外の補習教育がもっとも盛んな国のひとつは、シンガポールでないかと思う。もっともシンガポールの場合、学習塾も見受けられるが、主流を占めるのは、ひとり、または何人かで、家庭教師を頼むスタイルであった。

もちろん、ひとくちにシンガポールといっても、生活水準もさまざまだが、しかるべき家庭だと、小学生のうちから、週に2回程度、家庭教師を頼むが、月謝は専門学校の学生なら120ドル程度ですむが、シンガポール大学の学生だと200ドル、現職の教師は250ドルに達するという。

現在でも、シンガポールは大学卒の値打ちが高く、初任給でも1200ドルはかたいが、労働者の月収は300ドル、中学卒のホワイトカラーは400ドル程度だという。そのため家庭教師の月謝を払うために、仕事にでる母親が多く、それでも生活が苦しい。しかし多くの家庭では、かなりの苦勞をしても、家庭教師を頼んでいるらしい。

家庭によっては、生活費の半分近くが、家庭教師の月謝にとんでしまう。なんとも理解に苦しむ話なので、事情をたずねてみた。

シンガポールは英語と中国語、マレー語、タミール語の混在する多言語国家である。そしてマレー語の伝統を守ろうとするマレーシアと対照的に、英語化にシンガポール発展の道を見いだそうとしている。そしてその頂点に、英語で講義をするシンガポール大学が位置している。

小さな実験国家として知られるシンガポ

ルでは、住宅政策や交通政策などでもユニークな方法を実施しているが、学校もその例外でなく、徹底した形での実力主義、あるいは学力主義がとられている。

シンガポールの学校制度をくわしくふれるつもりはないが、大づかみにすると、小学校3年修了時に、成績の上位60%へ入る子は英語を中心とした2か国語のコース Normal Bilingual Course に所属する。さらに6年生の小学校修了時に、卒業試験 Primary School Leaving Examination を受け、その成績により、普通 Normal、飛び級 Express、特別 Special の課程に、5・4・1の割合で割りふられる。そして飛び級と特別コースの生徒は、4年修了後、中学教育修了認定試験 Certification of Secondary Education を受け、その結果で高校へ進学し、そして大学を目指すか、カリキュラム上は、シンガポールで9校しかない特別コースへ入っていることが、大学入試の近道となる。

このように、シンガポール大学を目指して、小学校のうちから、学力による選抜が行われるので、親たちは子どもに何とか学力を伸ばさせようとする。そうした教育の仕組みが、冒頭にふれたような家庭教師ブームを生んだのであろう。

こう考えてくると、日本の学習塾ブームは欧米には認められず、かといってアジアとも違う、かなりユニークな存在なのに気づく。塾通いの存在を考えると、こうした背景を視野に入れて、対策を立てていくことが必要なのであろう。

4. 国際比較調査から



1) 意欲的なNIESの子ども

これまでふれてきたように、日本に視野を限定すると、子どもの現在をとらえにくい。そう考えて海外へ出かけ、子どもの姿を観察する旅を重ねてきた。パリやシンガポール、そして、ニューヨークから香港と、それぞれの都市に10日間か2週間くらいステイして、学校や遊び場、家庭などでの子どもの行動を追いかける。何校かの学校を訪ね、何軒かの家庭で、子どもの姿を探っているうちに、その地域に独特の子どもの成長スタイルが浮かんでくる。

そして、1988年にはもう少し子どもたちの成長をシャープにとらえたいと、産業化された都市の子どもを中心に国際比較調査を実施してみた。そして、その結果を「7つの都市

の子どもたち」(vol. 8-10)の形でまとめると同時に、国際シンポジウムを持つことができた。

この調査では産業化された社会の子どもを分析対象としたが、表1のように、タイペイの調査では、大学進学を望む子の割合が91%に達した。協力してくれた学校が高級住宅地にあったので、その影響があるのかと思い、ダウンタウンの学校でも調査を行ってみた。その結果でも、大学進学希望率は87%と、9割に迫った。子どもたちに聞いてみると、同じ大学へ行くのなら、外国、とくにアメリカの大学で勉強したいという。小学高学年生の中で、アメリカ進学派はほぼ4割、それに、日本、ヨーロッパを加えると、6割前後が海

外留学を望んでいた。もちろん、そのために、成績のよさが必要なことは子どもたちも知っており、タイペイの小学生は2時間近く家庭学習をしているのに加え、英語の塾へ通っている子も少なくなかった。

NIESといえば、タイペイと共に、ソウルを思いおこす。周知のように、韓国では、1980年に大統領令で学習塾や家庭教師が禁止された。しかし裏をかえせば、それだけ受験競争が激しかったわけで、しかも、学歴についての有効な対策を打ち出せないままに禁止令が実施されたので、受験競争は深く潜行する形でくりひろげられている。

韓国では、毎年11月、日本の共通一次テストに相当する大学入試テストが実施される。日本と異なり、このテストにすべての私立大学が参加している。そして合否判定の中で共通テストの比重が7割に達するから、11月の結果が受験生にとってのすべてとなる。しかも、徴兵令があるので、男子は一浪しかできない。加えて、一流企業の数が少ないので、ソウルや高麗、梨花などの一流大学を卒業していないと、望み通りの人生を歩みにくくな

る。そうした背景が存在するだけに、高校生たちはかなり早い時期から受験勉強を始める。韓国の多くの高校では、5時近くまで授業があるが、その後も生徒たちは、夜の9時すぎまで教室で予習や復習に精を出す。それだけでも大変な感じがするが、高校生たちの一日はそれで終わらない。市内のいたるところに読書室があって、そこへ行くと、机と椅子、それにシャワー、設備のよいところではベッドもあり、そうした中で生徒たちは夜中の2時、3時まで、受験勉強に取り組む。

生徒たちはいつ寝るのか、そして、夕食はどうなっているのかという素朴な疑問がわくが、少なくともソウルやプサンなどでは、そうした生活を送っている高校生は多い。そうした姿を見ているだけに、受験勉強が「低年齢化し、ここ数年、中学生になってからでは遅すぎると、小学生のうちから系統的に一種の受験勉強を始める傾向が強まっている。

小学生をかかえる家庭を何軒か訪ねてみた。まず、専業主婦が多いのが目につく。学習塾や家庭教師が禁止されているから、母親が面倒をみないと、子どもの学力が伸びないとい

表1 将来の学歴

(%)

	東京・仙台・岡山			ソウル			タイペイ			シアトル・ヒューストン		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
中学まで	3.0	1.5	2.3	1.9	2.4	2.1	1.8	0.9	1.3	5.0	4.4	4.7
高校まで	34.3	37.5	35.9	4.2	5.1	4.6	9.4	5.3	7.3	9.9	11.2	10.5
大学まで	62.7	61.0	61.8	93.9	92.5	93.3	88.8	93.8	91.4	85.1	84.4	84.8*
自分の国で	87.1	87.2	87.2	56.5	51.1	54.0	39.5	37.0	38.2	94.6	92.2	93.4
外国で	12.9	12.8	12.8	43.5	48.9	46.0	60.5	63.0	61.8	5.4	7.8	6.6

*短大を含む

(以下のデータはいずれもvol.8-10「国際比較調査(7つの都市の子どもたち)」所収)

表2 家庭学習の長さ

東京・仙台・岡山	1時間33分
ソウル	2時間54分
タイペイ	1時間51分
シアトル・ヒューストン	1時間15分

う。それだけに、高学歴の母親の中にも、子どもの教育にかかりきりの人が少なくなかった。

そして、子どもたちもドリルや参考書を使って家庭学習を進めているほかに、英語の勉強も始めていた。ちなみに、調査に協力してくれたソウルの小学5年生の家庭学習の長さは2時間54分に達した。同じ時期に実施した日本の子の家庭学習の長さは1時間33分であるから、ソウルの子の勉強時間のほうが1時間20分ほど長い計算になる(表2)。

もちろん、ソウルやタイペイの子どもたちのすべてが勉強していたわけではない。しかしそうした形で、勉強に意欲をみせる子が多いことと、そうした傾向を多くの親たちが肯定している——子どものうちに、勉強しておかないと、立派なおとなになれないという感じで——のが特徴的であった。

そして、いずれにせよ、シンガポールの子も含めて、NIESの子に共通するのは意欲的な性格であった。

2) 子どもらしいアメリカの子どもたち

タイペイやソウルでは大学進学が社会的な地位獲得の有力な手段と考えられている。そうであるから、一流大学へ進むのには、それなりの犠牲が必要だという。そして親たちは、進学を目指してがんばっている子を誇りにし、どの親も子どもの学習を側面から援助しようとしている。

考えてみると、明治以降、日本の教育も子どもたちのそうした学習に対するやる気に支えられて発展してきたように思う。「末は博士か大臣か」に象徴されるように、立身出世が暗さを伴わずに語られていた時代である。いまでも、タイペイやソウルはむろんだが、シンガポールやクアラルンプールなどで、成

績のよさが明るい未来を約束すると信じてがんばっている子どもに出会う。たしかにそうした形をたどらないと、土着の文化からの脱出がむずかしく、それだけに近代化への発展途上の段階で、教育加熱現象が生ずるのは避けられないのかもしれない。

こうした背景を考えると、NIESの子のやる気の強さに、一昔前の日本の子どものイメージが重なってくる思いがした。

アメリカのシアトルで、ソウルと同じような調査を実施することになった。ハンブルや中国語とちがいで、英語なら多少の自信があるつもりだが、そうした気持ちはすぐにふつとんだ。同じように見える文章のひとつが古す

ぎたり、別のものはラフすぎたりする。考えてみれば、日本の調査票でも、子ども用のワーデンクを開発するのにかなりの時間、手こずった思い出がある。そうだとすれば、英語の調査票作りがむずかしくて当然であろう。

文字通りに、子どもに教えられるという感じで調査票の検討を進めていった。国際比較調査なので、東京やソウルと同じ項目で、アメリカの子どもにも質問したいと思った。しかし、いくつかの項目が、アメリカの子にびったりしないと、現地の教師たちからアドバイスがあった。そのひとつは、「朝起きたとき、食欲がありますか」がおかしいという。子どもは空腹なのだから、こういう質問をするだけ無駄だ。さらに、つきたい仕事にマンガ家が入っているのはなぜか。それにひきかえ、子どもたちに人気のあるタクシーの運転手や消防士、花屋などが入っていないし、市長や知事、大統領をつきたい仕事のリストにあげていないのは不自然だという。もちろん、アメリカに学習塾や家庭教師はないのでその項目は削除したが、家庭学習についても、2時間や3時間などという長さはスケールとしても妥当でない。このところアメリカの学校も宿題を出すようになったし、学力を伸ばす

ことに真剣に取り組んでいる。しかし、それにしても家庭学習は30分くらいが限度だろうという。

実際に調査を行ってみると、たしかに表3のように、アメリカの子の6割は朝に空腹を訴え(夕食だと8割近くが空腹だという)、また、家庭学習の長さは1時間15分、テレビの視聴時間は3時間19分(表4)であった。

アメリカの子どもたちに何になりたいかをたずねてみた。ちょうど大統領選挙の予備投票が近づいていたせいもあろうが「大統領になりたい」という子が多いし、市長になるのを望む子も少なくない。そうした一方で、アメリカンフットボールのクォーターバック、さらに、ピアニスト、スーパーマーケットの経営者、鳥の医者など、子どもたちはつきたい仕事を次々とあげていく。そして、その仕事について子どもなりのレベルで正確な知識をもっているのと、そうなりたいと真剣に話してくれるのが印象に残った。

いずれにせよ、小学高学年になっても空腹で目をさまし、タクシーの運転手になりたいと思い、宿題をすませたら、遊び回っている。なんとも子どもらしい生活である。もちろんシアトルもアメリカの都市であるから、調査

表3 朝は空腹か×性差

(%)

		東京・仙台・岡山	シアトル	シカゴ	ロサンゼルス	ヒューストン
男子	空腹	13.3	8.1	14.0	26.8	
	いつも					
	空腹 かつ いつも	35.8	24.2	18.4	35.4	
合計		49.1	32.3	32.4	62.2	
女子	空腹	7.1	4.8	11.0	19.1	
	いつも					
	空腹 かつ いつも	31.3	21.3	14.7	37.4	
合計		38.4	26.1	25.7	56.5	

に協力してくれた子どもたちの4割は、親の離婚を体験しているし、8割の子の母親はフルタイムで働いていた。したがって、家庭が子どもを保護する機能を失っているように思える。そうした傾向の一端が表5の朝食を食べずに登校する子がアメリカに多いという数

値となって表に表れている。加えて、性非行の低年齢化なども視野に入れると、アメリカがパラダイスなどという気にはなれない。しかし、少なくとも日本の子と比較すると、成長を迫られることなく、子どもらしい時をもっているように思う。

表4 テレビ視聴

	東京	仙台	岡山	日本計	ソウル	タイペイ	シアトル	ヒューストン	アメリカ計
テレビ所有台数	2.3台	2.3台	2.3台	2.4台	1.5台	1.8台	2.8台	3.2台	3.0台
昨日のテレビ視聴時間	2時間22分	2時間33分	2時間30分	2時間26分	1時間41分	1時間44分	3時間14分	3時間20分	3時間19分
テレビを毎日見る(ほとんど毎日見る)	83.9%	88.6%	95.4%	87.1%	74.5%	65.4%	84.3%	89.0%	86.6%
(テレビを毎日見る)	(56.5%)	(61.8%)	(56.5%)	(59.8%)	(33.1%)	(26.3%)	(76.1%)	(82.7%)	(79.4%)

表5 朝食の場所

	東京	仙台	岡山	日本計	ソウル	タイペイ	シアトル	ヒューストン	アメリカ計
自分の家で食べた	97.5	97.6	97.3	97.5	93.9	84.6	78.5	58.2	68.2
外の店で食べた	0.3	0.4	0.4	0.1	0.3	9.0	1.7	2.1	1.9
学校へ行く途中、歩きながら食べた	0.0	0.1	0.0	0.4	0.7	4.7	1.3	2.3	1.8
学校で食べた	-	-	-	-	-	-	5.9	15.7	10.9
食べなかった	1.2	1.3	1.7	1.3	5.1	1.7	12.6	21.7	17.2
子どものそう、その他	1.0	0.6	0.6	0.7	-	-	-	-	-

3) 働いている子どもたち

今回の国際比較調査は、都市化と子どもとの関係を考えようとしたので、調査地域は産業化された都市に限られている。しかし、子どもたちをトータルとしてとらえたとき、産業化された、いわば豊かな社会の中で成長する子どもはそれほど多くはない。アジアの多くの国々では、現在でも、午前・午後・夜間の三部制で小学校の教育が行われている。そして夜間にせよ、学校へ通える子は幸せなほうで、就学しないまま働いている子どもが少なくない。

というより、地球的な規模で子どもたちをとらえたとき、当然のここのように子どもたちが通学できる状況が生まれてから、まだ1世紀あまりしか経過していない。日本にしたところで、明治や大正、そして昭和になっても、働く子どもの姿はまれでなかった。無着成恭の『山びこ学校』は見方を変えると、子どもたちが労働をする記録でもある。

子どもたちが幼いうちから働かなければならない。それはあまりに悲惨だということで、児童問題に関心を寄せる人たちは、子どもたちが働かないですむ社会の実現を願ってきた。エレン・ケイの『児童の世紀』は、20世紀の到来を告げる教会の鐘の音を聞きつつ、書き綴った書物といわれるが、この中でケイは、19世紀までは大半の子どもは働かざるを得ず、運よく学校へ行っても、むちがうになっている。だから、子どもにとって牢獄のような世紀だった。それだけに20世紀を、子どもたちがのびのびと時をすこせる児童の世紀にしたいという。こうした願いは、国際児童年の形で結実することになるが、現在でも働くことから解放された子どもは少数派にすぎない。

アジアのどこの町でもよいのだが、マニラを歩いてみよう。路上で新聞やタバコを売っている子どもを見かけるし、街角で行商をしている子、乗用車のドアを開け閉めしてチップをかせいでいる子など、子どもも貴重な働き手としてがんばっている。いわゆるストリート・チルドレンの存在である。そしてフィリピンの経済情勢を視野に入ると、子どもたちのこうした姿はここ当分続くと思わざるを得ない。しかも、ストリート・チルドレンをかかえる社会のほうが、現在でも地球の大半を占めているのは周知の通りであろう。

しかし、マクロなとらえ方をするなら、この社会にせよ、子どもは小さなおとなと考えられ、子どもなりに働くのがあたり前であった。子ども時代は存在しないのである。そうした社会が近代化の歩みを始めるにつれ、子どもは学ぶ存在として位置づけられるようになる。つまり、一人前の社会人になるには読み書き能力の獲得が必要で、それを獲得するための期間が児童期ということになる。その段階からさらに産業化が進み、学歴を媒介にして社会移動が行われる時代を迎えると、学力のもつ意味が大きくなり、子どもたちは勉強に追われるようになる。すでにふれたソウルやタイペイの子どもたちの姿は、そうした過渡期の産物といえなくもない。

そして社会が成熟するにつれて、価値観の多様化が進み、学歴に頼らなくとも自己実現を図れる時代を迎える。アメリカの子どもたちの多様な生き方がその例証となろう。そして、北欧やスイス、ドイツなどを訪ねても、その子なりの生き方に自信をもって暮らしている子どもに出会う。

4) ひよわさの目立つ日本の子どもたち

そろそろ、日本の子どもの話へ戻ろう。こうした諸外国と対比させて、日本の子をとらえたとき、どういう特徴が浮かんでくるのか、ひと言でいうなら、豊かな社会に成長する幸せな子どもたちになるのであろうか。働かないでよだけでなく、子ども部屋があり、テレビやラジカセ、学習参考書などがそろっている。ほかのアジアの子どもたちからすると、王子や王女のような暮らしであろう。しかし、そうした幸せは外見だけで、日本の王子たちはどこことなくひよわで、やる気に乏しい印象を受ける。日本の子たちも学習塾通いをし、勉強に追われている。しかしソウルやタイペイの子どもたちが学歴の効用を高く評価し、よい学校への進学を目指していきいきと勉強を

しているのと比べ、受け身の感じで、仕方なく勉強をしている雰囲気はただよう。もちろん、そうかといってアメリカのようにその子なりのペースで、自分を生かしてがんばっているともいえない。

素直で聞き分けのよい子どもなのはたしかだが、意欲に乏しいのである。考えてみれば無理もない。子どもたちは、日本が豊かな社会になりきってから生まれた。したがって、飢えや渴きを知らない。しかも、ほしいものは何でも手に入るので、自分から何もしないでもよい。つまり、やる気を出さなくてもよい状況の中で育ってきたのである。

日本の子どもたちにつきたい仕事をたずねると、「別に」という返事が戻ってくる。ど

表6 子どもの自己像

(%)

	東京・仙台・岡山 （各100名）	ソウル	タイペイ	シドニー
スポーツのうまい子	15.7	25.1	20.7	37.5
友だちから人気のある子	8.2	7.1	12.9	28.0
よく勉強のできる子	4.5	8.0	6.2	34.7
正直な子	8.8	18.0	13.4	29.3
親切な子	10.8	20.0	11.9	34.0
よく働く子	14.0	24.7	12.4	36.7
勇気のある子	15.8	23.9	14.8	39.6

「とてもあてはまる」割合

っちみちなるようにはかなれないから考えるだけ無駄だ。それに、将来についてまじめなことをいうのはヤボったい。そうした気持ちが重なりあってなのか、冷めた反応をする子が多い。しかし、井上靖の『あすなろ物語』のように檜になる日を夢みて、あすは檜になろうと願うのが、子どもらしさであろう。おとなと異なり、子どもたちは未来をもっているから何にでもなれる可能性を残している。少なくとも未来を夢みられるのは、子どもの特権であろう。しかし、日本の子どもたちの中で、よき父母になりたいという子が多い。

5) 成長欲求の乏しさ

国際比較調査「7つの都市の子どもたち」(vol.8-10)の中では東京、仙台、岡山、ソウル、タイペイ、シアトル、ヒューストンと、7つの都市の子どもたちの学習とその環境に関わるデータを紹介しているが、そうした中で日本の子の現在をある程度まで明らかにすることができた。つまり、7つの都市の子どもたちが、かなりの共通した成長の姿を示しながらも——すなわち現代の日本の子どもたちの中にある問題点を共有しながらも、それぞれの都市でそれぞれに特徴的な成長ぶりを見せていた。そして、データの中で浮かび上がった現代の日本の子どもたちの成長の姿は、成熟社会といわれている、すなわち社会自体が若さを失って精神的な活力におとろえの見えはじめた日本社会の姿をそのまま反映した、勢いの失われた姿であったように思われる。

かつて日本社会がもっていたようなおだやかさと暖かさはタイペイの子どもたちの暮らしの中にあり、やる気とそれを支える止めどもない活力は今もソウルの子ももっている財産である。また家庭の姿は荒れ、子どもたちにとっては必ずしもいごちのいい場ではなくなっているかに思えるが、しかしそこには性役割をはじめとする伝統的な社会のしがらみからはかなり十分に自由になって、

もちろん、よき親でもかまわないのだが、もう少しビッグな夢を抱いてもよいではないか。おとなたちは、それなりにがんばったあとで、結果としてよき親になったのであって、親になろうと思いつつ成長してきたのではない。

いずれにせよ、そうした意欲の乏しさは子どもたちの自信のなさ、あるいは、自己像の暗さと関連している。表6のように、現在の自分に自信を持っていない子の割合は、日本の子の場合、諸外国と比べ、きわめて高いのが気がかりである(表中の数値は自信のある割合)。

自分自身の能力を頼りに明るい自己像の下で、子ども時代を楽しみ生き生きと将来への準備をしているアメリカの子どもたち。それらに比べると日本の子と環境は、あらゆる意味で特色がなさすぎると思うのは、われわれだけだろうか。

ちなみにこの点を示す最後のデータとして、表7、表8を掲げたい。子どもたちが「早くおとなになりたい」か、「いつまでも今のような子どものままだがいい」か、「もっと昔(幼稚園時代)に戻りたい」かは、その社会の子どもの成長欲求の差としてとらえることが可能だろう。さて7つの都市の子どもたちは今どんな成長欲求をもっているのだろうか。表7に掲げたように、ソウルの子は「もっと昔に戻りたい」(43%)、タイペイの子は「早くおとなになりたい」(50%)、そしてアメリカの子は「いつまでも子どものままでいたい」(72%)という反応を示している。

ソウルの子は世界で今一番激しく勉強し、世界の国々の国力へ近づくべく追いつけている韓国の社会的期待の中で、疲労を感じているかに思える。しかしそれはまた十分な活力に支えられた疲労であり、それが激しいデッドヒートを演じながらも「もっと小さいころの自分に戻りたい」というつぶやきになって

表れたのだろう。そしてアメリカの子どもの現在の生活は、何ととっても広い土地と陽気な人々の作り出す自由な社会の中で、その家庭の中には不幸の影があっても、かなり十分に子ども時代を楽しめる性質のものなのであろう。

そしてタイペイの子どもたちは、一昔前の日本にも似て、せまい国土の中から外の世界へ目を向けて生きようとしている。中国大陸との微妙な関連も人々の心に何らかの構えを生み出していることも想像される。

しかし日本の子どもたちは、そのどれでも

ない。成熟社会の中でわれわれおとなたちがともすれば将来への目標を失いはじめているように、われわれの子どもたちもまたそうなのかもしれない。

あと10年ほどで21世紀を迎える。そして、いずれ現在の子どもたちが社会を担わねばならない時代となる。そうしたとき、意欲に乏しい現在の子が荒波のさかまく、国際社会の中で生き残っていけるかに不安をおぼえる。

平和な安定した社会になったのはよい。幸せな家庭もすばらしい。しかし、子どもたちはそうした環境に安住し、その中に埋没し、

表7 成長欲求

(%)

	東京・仙台・岡山	ソウル	タイペイ	シアトル・ヒューストン
早くおとなになりたい	32.8	34.4	50.4	21.8
子どものままだがいい	34.9	22.8	12.4	71.8
もっと昔に戻りたい	32.3	42.8	37.2	6.4

表8 成長欲求×性差

(%)

	東京・仙台・岡山	ソウル	タイペイ	シアトル・ヒューストン
男子				
早くおとなになりたい	30.4	31.1	47.9	21.6
子どものままだがいい	41.3	24.9	15.9	71.7
もっと昔に戻りたい	28.3	44.0	36.2	6.7
女子				
早くおとなになりたい	35.2	38.8	53.1	22.2
子どものままだがいい	28.2	19.9	8.8	71.6
もっと昔に戻りたい	36.6	41.3	38.1	6.2

自分から何かをしようという意欲に欠ける。そうした子の意欲をひきだし、自信をつけさせるのにどうしたらよいか。今のうちに、真剣に考えておきたい気持ちがする。

そして具体的に、子どものやる気を育てるのにどうしたらよいかの問題となる。もちろん、NIESやそれ以前の状況へ戻れないのであるから、豊かさの中で子どものやる気を伸ばさねばならない。考えてみると、おとなたちは先回りをする形で子どもの世話をしている。したがって、おとなたちは子どもをつき放し、子どもたちが子どもだけの世界を

作るのを認めてはどうか。地域ではむろんのこと、家庭や学校でも、子どもだけの時間や空間を保障する。そして、多少の失敗や逸脱は大目に見る。そうした形で、おとなとの距離を置くことの中から、子どもなりに、争いを体験したり、不足感を味わったりして、たくましさが育ってくる。いずれにせよ、子どもたちの成長のプロセスをトータルとしてとらえなおすことが、何よりも必要なことのように思われてならない。